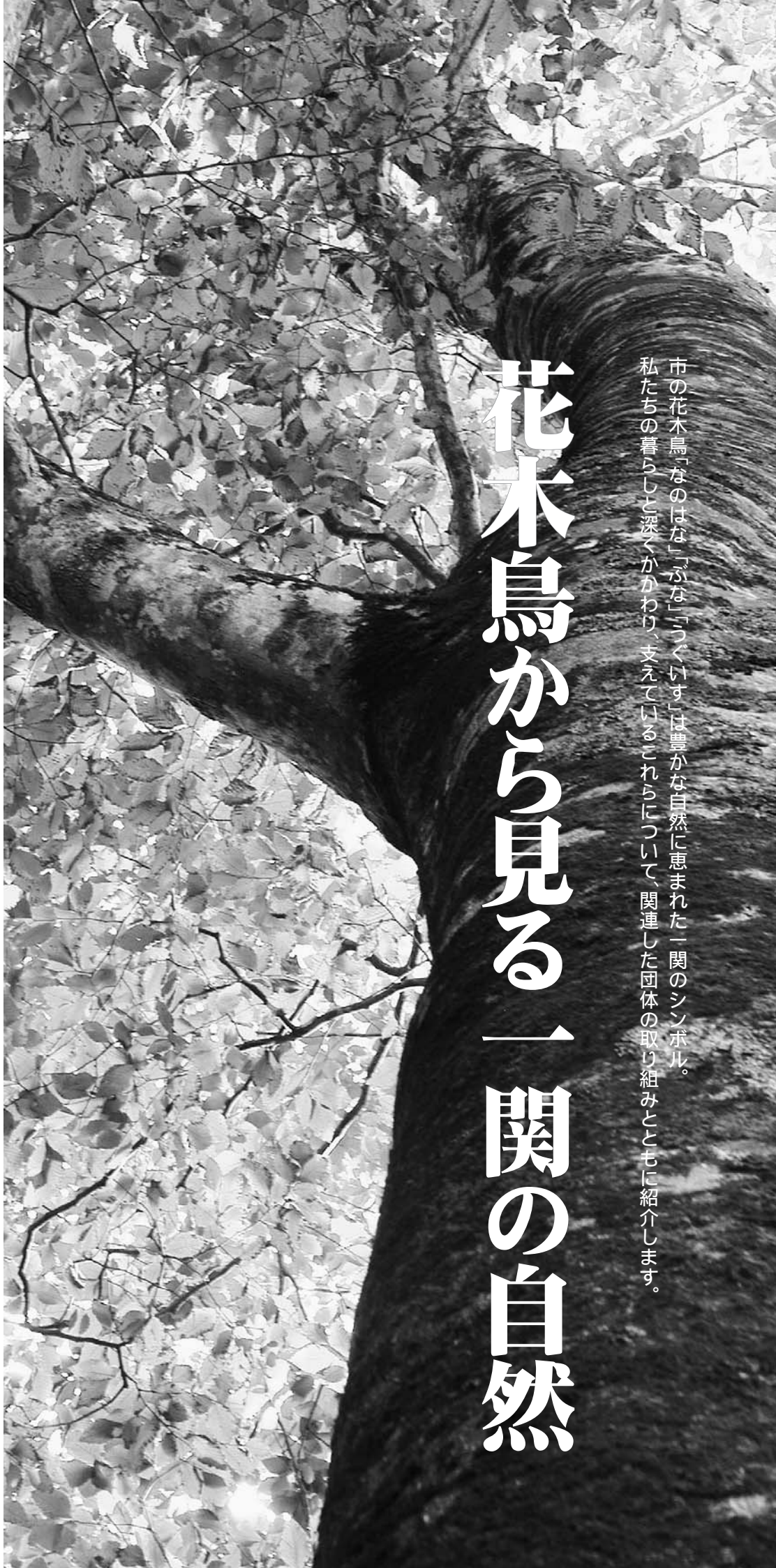


市の花木鳥「なのはな」「ぶな」「つくいす」は豊かな自然に恵まれた一関のシンボル。私たちの暮らしと深くかかわり、支えているこれらについて、関連した団体の取り組みとともに紹介します。

花木鳥から見る一関の自然



勇壮で堂々とした森の主
水を抱き多様な生き物をはぐくむ
豊かな自然を象徴する木

ぶな

大きいものは高さ30mにも達する、勇壮で堂々とした森の主、ぶな。特徴的な灰白色の樹皮にはよくコケが生え、独特の模様を形作ります。ぶなといえば世界自然遺産に指定されている白

神山地のぶな林が有名です。市内では、栗駒山ろくにぶなの原生林があるほか、室根山、束稲山とそれぞれの地域を代表する山に生育しています。身近な「里山」ではなく、人手のあまり

入らない奥の山に生えているため、多くの人たちにとっては見る機会の少ない木といえるでしょう。それでもぶな林は山菜取り、キノコ採りなどの場として親しまれてきました。

市民団体の取り組みが実り 森林生態系保護地域に指定

中でも栗駒山のふもと、真湯温泉付近では、国道342号沿いに見事なぶなの大木を見ることが出来ます。ミズナラ、トチノキ、カツラ、イタヤカエデなどと混交林を形成し、整備された遊歩道で気軽に森林浴を楽しむことができます。「交通のアクセスのいい場所にこのようなぶな林があるのは、全国的にもまれ」と語るのは、特定非営利活動法人須川の自然を考える会(会員42人)の熊谷健理事長。同会は昭和63年の設立以来、ぶな林を始めとする栗駒山ろくの生態系の保護を訴えてきました。当時営林署でぶな林を伐採する計画もありましたが、活動が功を奏し、岩手・秋田・宮城の3県にまたがる栗駒山、栃ヶ森周辺地域、総面積1万6310畝が平成6年、県内では3番目となる森林生態系保護地域の指定を受けました。本市に属する面積は3028畝で、原則とし



左 ブナの葉の縁は波状。写真は9月に撮影したため虫食いも
上 種をまいて2年目の、ぶなの苗木。葉の先には来年の芽がすでにできています
右 三角すいの形のぶなの種子。高カロリーで山の動物たちの大好物



ぶなの森まつるべ館を拠点とした「まつるべ自然学校」は子どもたちを対象に活動
上 一関小学校の児童とぶなの森を散策
下 ぶな林から流れ出る川にすむ生き物を調査

て登山道以外は立ち入り規制が行われています。「ぶなは豊かな森の象徴」と語る熊谷理事長。「大きな機能の一つは保水力。保水力はどの樹木にもありますが、ぶなは寿命が長く大木に成長する分、大きな保水力を誇ります。雨水や雪解け水を一時的に土壌にため、その後ゆっくりと流し出す、天然のダム。飲み水も、水田の用水も支える、一関の水がめなのです」

森を守り育てることから自然を未来へつなげたい
保護地域の指定によりぶな林保護の目途が立ち、同会が現在力を入れているのは自然体験と祭時地区の地域づくり。閉校した分校を改修した「ぶなの森まつるべ館」を16年に開館し、環境教育の拠点としています。ぶな

の苗木を育て、子どもたちと植樹をしたり、木工に挑戦したり。今年祭時地区内の休耕田を借り、コスモスを育てました。外から祭時地区の地域づくりに取り組むのは、「ぶな林を支えている地域の継続が、将来のぶな林を守ることにつながるから」と熊谷理事長。森を守る試みは、わたしたちの未来の暮らしを守る試みにつながっていくに違いありません。

ぶな

分類 ブナ科ブナ属
特徴 温帯域に生育する落葉広葉樹。北海道南部、本州、四国、九州に生育する日本固有の種。ブナ属はヨーロッパ、東アジア、北アメリカ東部に分布し、日本にはぶなのほかイヌブナが分布。